〔特集：香港の過去と現在〕

観光名所としての重慶大厦
――旅行メディアにおける「怪しいビル」像の展開――

Chungking Mansions as a Tourist Attraction:
Change of its ‘Shady Building’ Image in Japanese Tourist Media

岩 田 晋 典

IWATA Shinske

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: shinskito@gmail.com

Abstract

The aim of this paper is to examine the representation of Chungking Mansions（重慶大厦）in Japanese tourist media. The dingy 17story building is located in showy Nathan Road in Kowloon, one of the main tourist drag in Hong Kong. Although it is well known for cheap accommodation, exchange and ethnic restaurants, the study on the ‘shady building’ has been limited. Focusing on two major Japan’s outbound travel guidebook series, “Chikyu no Arukikata（地球の歩き方）” and “rurubu johoban（るるぶ情報版）”, this paper analyses different sorts of tourist media and reveals 1) that discourse of the building as ‘shady’ or ‘fishy’has been consistently recognizable since 1990’s, 2) emphasis on exoticism including racism depends on travel guidebooks and Chikyu no Arukikata has been giving an moderate and utilitarian account, and 3) although tourist media in general underscore the shadiness, they rarely explain how or why the building is “shady”.

Ⅰ．はじめに

いわゆるバックパッカー的な個人旅行をして東アジアや東南アジアを周遊したことがある人であれば、「チョンキンマンション」の名を一度は耳にしたことがあるにちがいない。漢字で「重慶大厦」、英語では“Chungking Mansions”と書くその建物は、ゲストハウス

と呼ばれる安価な宿泊施設を中心にした17階建ての巨大雑居ビルであり、香港九龍半島南端、尖沙咀を南北に貫く目抜き通りネイザンロード（彌敦道／Nathan Road）沿いの一等地に位置する[1)]。

約30年前筆者が初めてその存在を人づてに聞いたときの印象を正確に表現するのは容易ではない。が、あえて試みるとすれば、「チョンキン」という珍妙な響きに「マンション」という高級感を醸す語彙が組み合わさっているアンバランス感、そして尖沙咀の一等地に貧乏旅行者が泊まる安宿の集合体がそびえ立つというチグハグ感であったように思える。「香港だったらチョンキン」が、のちに“バックパッカー”と呼ばれるようになった個人自由旅行者の間でひとつの合言葉であった。

日本の個人自由旅行者の間で重慶大厦が有名になったきっかけに沢木耕太郎による小説『深夜特急』がある（沢木、1994）。その中の記述は、その後の重慶大厦に関する旅行ガイドブックの原型の体をなしていると言える。

> 男は無表情に荷物を拾い上げ、何も言わずに歩きはじめた。私も仕方なく後に従った。雑居ビルの中の迷路のような商店密集地を通り抜けると、突き当たりにエレベーターがあった。年代物らしく、降りてくるスピードが恐ろしくのろい。ようやく一階に到着し、扉の開いたエレベーターからは、強烈な香辛料の匂いが溢れ出てきた。中国人に混じって何人ものインド人が乗っていたのだ。全員が降り、私が男の後から乗り込むと、また別のインド人が走り込んできた。この雑居ビルにはインド人がかなりいるようだった。

“混沌さ”やエレベーター、“インド人”そして“臭い”は、程度の差こそあれ、今日の旅行メディアでも重慶大厦を描写するための重要な要素となっている。本作品中この「ビル」は重慶大厦とは書かれていないが、後に沢木自身が「いまはもうアジアを旅行する人にとってはよく知られた存在になってしまったが、『重慶大厦』という名の雑居ビル」であったと認めている（沢木、2008: 106）。

このエレベーターは重慶大厦の異国さの象徴であったようで、重慶大厦のリピーターでもある作家の下川裕治は、同ビルのエレベーターを「曲者」と呼びつつ、重慶大厦居住者・滞在者の利用方法を 4 ページにわたって詳しく描写している（下川、2005: 83–86）。

重慶大厦は、1961年に文字通りマンションとして完成している。「重慶」という名は、マンションの開発業者であったフィリピン系華人が中華民国の重慶国民政府にあやかって

1）正確な住所は、尖沙咀彌敦道36–44であり、北隣には香港金域假日酒店（Holiday Inn Gold Mile Hong Kong）がある。

付けたものだという[2)]。その後、商用で香港に来た華人、ベトナム戦争時には米軍関係者、そして1970年代には中華人民共和国への旅行ビザを求める若者個人旅行者たちというように、主な顧客層を変えつつゲストハウスが増加していく。その一方で、重慶大厦オープン当初から元英領植民地の南アジア人の商店が少なからず存在しており[3)]、“インド人が多い重慶大厦”というイメージは初期の時期にある程度形成されていたようだ。

建築物としての構造は日本で見つけるのが困難な類いのものであり、“座”と呼ばれる5つの細いビルが地上階・下層階を共有しつつ一つの束となって重慶大厦という巨大ビルを構成している。そのため重慶大厦自体の正面玄関は一つであり、地上階にそれぞれの座のエレベーター乗り場が配置してある。ただし各座が別々であるために、上層階で座から座へ移動することはできない。座同士の上層フロアの共有もないし、渡り廊下も設置されていないからだ。

この雑居ビルを一躍有名にしたのは1994年の香港映画『重慶森林』（英題“Chungking Express”、邦題『恋する惑星』）であろう。この映画は重慶大厦を“南アジア系の人々で溢れる、暗く怪しい犯罪の巣窟”のように描いており、日本を含めた世界的なヒットによってこのステレオタイプが各国に行き渡ったといえる。

このように重慶大厦は、アジアのツーリズムやポピュラーカルチャー、さらにはグローバル化についての研究の対象になりうるものなのであるが、これまで十分に研究されてきたとは言い難い。英語圏では、近年香港中文大学の文化人類学者 G. マシューズによって民族誌『Ghetto at the Center of the World: Chungking Mansions, Hong Kong』（Mathews, 2011）が刊行され、重慶大厦におけるグローバル化が論じられているが、日本国内における研究では重慶大厦自体に関する先行研究は皆無と言ってよい。

本稿ではその出発として、香港を対象にした日本語旅行メディアで重慶大厦がどのように扱われてきたのかを検討したい。バックパッカー向けのガイドブックは別にして、香港に関する旅行メディアにおける重慶大厦の扱いは小さなものと言ってよく、全く触れないものも珍しくない。けれども、本稿で論じるように、その扱いにも一定の変化を確認することができる。以下本稿では、『地球の歩き方ガイドブック』香港シリーズと『るるぶ情報版』香港シリーズに重点を置きつつ、近年刊行あるいは生産されてきた他の旅行メディアも射程に加え、旅行メディアにおける重慶大厦のあり方を考察し、いくつかの論点を明らかにしたい。

2）『重慶大厦 officail site』「History」（http://www.chungkingmansions.com.hk/history.htm#&panel1-2、2018年1月6日閲覧）より。

3）（Mathews, 2011: 34）に記録された、当時の重慶重慶居住者の記憶。

Ⅱ.『地球の歩き方ガイドブック』香港シリーズ最新版の記述

重慶大厦が旅行ガイドブックでどのように記されるのか、その具体例として『地球の歩き方ガイドブック』香港マカオシリーズ（以下、『地球の歩き方香港』シリーズ）の最新版である2017年版の例を紹介しよう[4)]。

現在日本社会で流通する旅行ガイドブックの中で『地球の歩き方ガイドブック』シリーズが中心的な位置を占めていることについて異論はなかろう。かつては貧乏旅行のバックパッカー向けのガイドブックというイメージがあったが、今世紀に入ってからはむしろオールラウンドでレファランス的な旅行ガイドブックとしての地位を確立している[5)]。1979年以来の歴史を持ち、バックナンバーも入手しやすく、旅行表象の推移をたどるのに適したソースとなっている。

『地球の歩き方香港』シリーズの最新版で重慶大厦の名が現れるのは、まず尖沙咀のエリア情報について述べる章である。同書によれば重慶大厦が位置する尖沙咀とはそもそも以下のような区域である（地球の歩き方編集室、2017: 186）。

> 香港は「おもちゃ箱をひっくり返したような街」と人は言う。近代的な中環や、庶民的な生活感の漂う地区もあるが、香港といえば即、尖沙咀のイメージが浮かび上がってくるくらいに、尖沙咀の魅力と毒と刺激は強烈だ。
>
> そういう街、尖沙咀はあなたにどんな体験をさせてくれるだろうか。
>
> 香港でいちばん重要な地域はと問えば、答えはふたつに分かれるだろう。香港島中環と、九龍尖沙咀。ヴィクトリア湾で隔てることわずか1.5km のこのふたつの街は、まったく様相を異にする。中環は未来都市を思わせるモダンな高層ビルが建ち並び、行き交う人々もスーツに身を固めたエリートサラリーマンが目立つ、香港経済の中枢部。一方、尖沙咀は商業の街である。超モダンな高層ビルの代わりに、あらゆる種類の店が、新旧、高低、いっしょくたに建ち並ぶ。ペニンシュラホテルのアーケードで何千ドルものチェックを切る人も、バックパックで歩き回る人も、どんな旅人もこの街にならいる。東洋と西洋のミックスカルチャーは、まさにひっくり返したおもちゃ箱なのだ。（以下略）

“混沌”を香港の魅力とする言説は、1970～1980年代に広まり徐々に定着していった典型

4）『地球の歩き方ガイドブック』シリーズは通常「2017～2018」というように年をまたいだ巻名になっているが、本稿では簡潔に示すために、巻名の西暦の前年のみを記すこととする。

5）『地球の歩き方ガイドブック』シリーズがいかに“貧乏旅行者向け”というイメージから脱却することを目指してきたかについては（山口・山口、2009）が詳しい。

的な香港イメージの一つであり（大橋、2002）、『地球の歩き方香港』シリーズからすれば尖沙咀こそそういう意味でもっとも香港的な場所となる。後述するように重慶大厦自体も雑多・混交した世界のように描かれることからすれば、「いっしょくた」・「ミックス」の「おもちゃ箱」である尖沙咀の構成要素である重慶大厦は二重の意味で香港的な場所と言えるのかもしれない。

続いて、尖沙咀を南北に貫くネイザンロードを軸に同地区が説明されていくのであるが、尖沙咀の地図の右側の本文枠外に「重慶大厦」と書かれた同ビル正面入口の写真が掲載されている。キャプションは、「国際色豊かな人々が行き交うネイザン・ロード。通り沿いには宝飾店や薬店が多い」というものである（地球の歩き方編集室、2017: 187）。キャプション本文に「重慶大厦」という言葉はないものの、同書の読者が最初に目にする「重慶大厦」の字はこれである。

さらにその 2 ページ後の本文枠外に、重慶大厦に関する文字情報が現れる（ibid.: 189）。

重慶大厦は異色の存在[6)]

一歩足を踏み入れると、さまざまな人種が入り乱れ、猥雑であやしい混沌さに包まれる。声をかけてくる輩はきっぱりと無視するとして、宿泊以外でのここの利用価値は、両替のレートのよさと多国籍な料理の数々。B 座3/F にあるインド料理レストランは安くてうまいと評判がよい。

重慶大厦内の両替屋

どの店もほとんどが手数料なし。ただし、レートには差があり、入口付近の店はよくない。何軒か見て回るとよい。日曜もやっているところがある。（→ P. 487欄外）

この短い箇所には、以下に論じていく重慶大厦のイメージがかなりの程度凝縮されていると言ってよい。“入り乱れる人種”、“猥雑さ”、“怪しさ”、“混沌”、客引きである。また、重慶大厦の利用価値が安宿と両替、エスニック料理（とくにインド料理）と言明されている。前述の引用箇所「尖沙咀の魅力と毒と刺激」を実際に感じるのに最適な場所が重慶大厦なのだと受け止める者がいてもおかしくなかろう。

当然ながら宿泊について述べる箇所でも、重慶大厦は詳しく紹介されている（ibid.: 358）。

安宿の集合ビル『重慶大厦』

重慶大厦はネイザン・ロードのインペリアル・ホテル（帝國酒店）とホリデイ・イ

6）本稿において、引用箇所の下線部は旅行ガイドブック内の章タイトルや見出しを示す。

ン・ゴールデンマイル（香港金域瑕日酒店）の間にある名物安宿ビルだ。17階建て（エレベーターは16/F まで）のビルの中に、個人経営の宿がぎっしり。宿泊客は黒人、白人、洋の東西を問わずあふれている。宿のタイプは日本の民宿やヨーロッパのオステルといった感じ。１泊200～400HK$ くらい。建物を入った左側にＡ・Ｂ・Ｃ座の、右側にＤ・Ｅ座のエレベーターがある。各座とも偶数階・奇数階止まりに分かれ、それぞれ２基ずつ計10基がある。以前は犯罪の温床ともいわれたが、現在では治安改善に力を注ぎ、多数の監視カメラを設置、警察官の巡回を強化し、G/F 中央部にセキュリティの詰め所が設けられ、入口にはシャッターが付けられた。

安宿（ゲストハウス）は、ドミトリーから、シングル、ツイン、２段ベッドルームなどさまざま。窓がないところが多い。構造上、火災が起きた場合は危険であるということを念頭におくこと。実際に火災に遭遇した日本人客もいるので、「自分は大丈夫だろう」と安易に考えないほうがよい。（以下略）

重慶大厦の特徴を語る上で“エレベーター”も重要な要素になることは、小説『深夜特急』以来の伝統のようなものであるが、ここでは淡々とした最低限の説明となっている。後述する初版（1988年版）での取り扱いとは対照的である。

このページの左下には、「客引きによるトラブル続出」という注意情報も記載されている（ibid.: 358）。“重慶大厦の客引き”への注意喚起は「トラブル対策」の章でも確認できる（ibid.: 496）。

さらに、「準備と技術編」の「旅の予算とプラン」の本文欄外でも、繰り返し重慶大厦が紹介されている（ibid.: 466）。

格安に泊まるならゲストハウス

ゲストハウスが集まっているのは、尖沙咀駅近くの雑居ビル「重慶大厦」や「美麗都大厦」。価格はドミトリーが１泊80～、シングルが１泊250～350HK$ 程度。政府が義務づけている営業認可ロゴが張リ出されているかどうかが安全の目安となる。

そして重慶大厦については（ibid.: 466）、

1961年建造の雑居ピル。インドや南アジア、アフリカ系の店が集まる“人種のるつぼ”。かつてはバックパッカーの聖地といわれ、香港映画『恋する惑星』の舞台にもなった。５ブロックに100軒以上のゲストハウスが集まっている。

と説明されている。この箇所は前年の2016年版から設けられたものだ。これ以前に、『地

球の歩き方香港』シリーズで重慶大厦のアフリカ系の人びとの存在に触れた箇所は見当たらない。

ここでも、前述の“入り乱れる人種”と同じ「人種のるつぼ」という言葉が用いられている。また映画『恋する惑星』への言及もある。この映画は重慶大厦を観光アトラクションとして紹介するうえで重要な役割を果たしている。

これらの箇所の他に両替に関するページやバス路線の停留リストにも重慶大厦の名は現れるが、以上の引用で最新版の『地球の歩き方香港』シリーズにおける重慶大厦の取り扱い箇所は全てカバーできている。

以下の事例と比較すると、このガイドブックで特徴的なのは「宿泊以外でのここの利用価値は、両替のレートのよさと多国籍な料理の数々」というように、重慶大厦の価値を実用性にもとづいて明確に限定しているところにある。いいかえれば、香港の名物・名所として見物や訪問を勧めているのではないことには注意しておきたい。

Ⅲ.『地球の歩き方ガイドブック』香港シリーズの初版からの変遷

こうした最新版の記述内容がどのように変遷してきたのかを把握するために、同書の初版にさかのぼってみよう。初版である1988年版では、「香港・マカオのホテル案内」のという章の中で「安宿が集まっている重慶大厦」として10個のゲストハウスを紹介し、次のように重慶大厦での滞在を推奨している（地球の歩き方編集室、1988: 406）。

> 安宿の少ない香港ではありがたい、パックパッカーが泣いて喜ぶ名物安宿だ。16階建てのビルの中に、個人経営の宿がぎっしり。宿泊客は黒人、白人、洋の東西を問わずあふれている。日本の民宿やヨーロッパのオスタルといったタイプで、経営者一家と一緒の家に泊まるから安全だ。女の子ひとりでもだいじょうぶ。アパートを借りて住む気分になれる。１泊だいたい22～160HK$くらい。
>
> 建物を入った左にエレベーターが２基あり、偶数階止まりと奇数階止まりに分かれているが、おそろしくボロいエレベーターなのでちょっと戸惑う。別に恐いことはないから乗りこんで、どんどんあたってみよう。

エレベーターは最新版ではごく簡単な記述になっているが、初版ではこのようにユニークなものと位置づけられている。

その後、こうしたゲストハウス紹介の箇所は火災のリスクについて喚起する内容が重点

的になる[7)]。それと同様に、推奨を含まない[8)]、より客観的な説明に変化し、2003年以降はほとんど変わることがないまま、先に引用した最新版の記述に至っている。

上記引用箇所の「女の子ひとりでもだいじょうぶ」という箇所に注意されたい。この言葉だけから“怪しさ”を読み取るのは行き過ぎであると思われるかもしれない。けれども上記箇所の150ページほど前に記載されている投稿文「香港に『人種のるつぼ』を見つけた」（ibid.: 267）というボックステキストを見れば、この言葉が持つ意味をさらに深く理解できるであろう。

> 気の弱い女の子なら、目当てのフロアーへたどりつく前に、めげてしまうんじゃないかしら、と思うほど一種異様な空気。はっきりいって、クサイのだ。蒸し暑い亜熱帯の空気が、ここ重慶大厦のエレベーターの中でさらに圧縮され、汗の臭いと混じってよどんでいる。
>
> 10人ほどがやっと乗れる狭いスペースは白い人、黒い人、黄色い人と、さながら人種の見本市。この中でほんの数十秒間、いろんな色の肌と肌をくっつけ合いながら、古びたエレベーターは今日ものろのろと昇ったり降りたりしている。今にも溶けだしそうな蒸し暑さに、みんなうんざりした顔をして……。ああそうか、この鉄の箱を「人種のメルティング・ポット」というのね、と私はひとりで納得しながら、背中を流れ落ちる汗を感じていた。　茂木陽子　’87. 6

この“人種の臭さ”に関する差別的な記述は、初版から1995年版まで確認することができるが、人種や民族の“臭い”を蔑むレイシズム的記述は近年出版された旅行メディアでも確認することができるものである[9)]。それがエレベーターという重慶大厦のユニークさの象徴とともに記述されている事実は興味深い。

また、初版には重慶大厦のレストランの紹介もある。「世界の料理が大集合！」というページがあり、「香港は今、エスニックブーム」（ibid.: 97）であるとして、重慶大厦のインド料理店が紹介されている（ibid.: 98）。また、「尖沙咀おすすめレストラン」という箇所でも、重慶大厦内のネパール料理店の紹介がある（ibid.: 272）。先に見たように、重慶

7）1993年版からは「部屋選びの際は慎重に」という消防士の旅行者の投稿が付記されるようになり、さらに1996年版からは火災に関する注意喚起が投稿ではなく本文中に記載されるようになっていく。

8）この引用箇所のほかに、「深夜に香港に到着。さあ、どうする！」という箇所でもいくつかのアドバイスとともに、重慶大厦での宿泊が推奨されている。「安宿をめざす人で、ホテルを決めていない人は、とりあえず重慶大瘦へ向かおう。ここへ行けばまず泊まれないことはない。」（地球の歩き方編集室、1988: 403）。この記述は初版から1999年版まで確認できる。

9）たとえば、（自由旅行マニュアル製作委員会、2008: 30–35）。

大厦の南アジア料理レストランは現在でも言及されるものであるが、個々のレストランの具体的な紹介はその後徐々に消えていく。

初版から最新版への変化を辿って分かることとして、宿泊や両替、食事といった実用性に重点を置いた記述が中心になっていく点、また、初期にあったエキゾチシズムをくすぐるオリエンタリズム的記述がなくなり、リスク対策を促す実用的な情報が増加していったという二点を指摘できる。こうした変化は、『地球の歩き方ガイドブック』シリーズが、シリーズ全体の方針として“貧乏旅行者のガイドブック”というイメージからの脱却を志向しつつ、今日オールラウンドなレファランス的なガイドブックとしての地位を確立してきた展開の表れなのかもしれない。

たしかに最新版の2017年版でも「さまざまな人種が入り乱れ、猥雑であやしい混沌さに包まれる」という部分があり、エキゾチシズムが感じられないわけではない。けれども、その箇所の直後には客引き対策と「利用価値」が述べられている。この記述は、初版のボックステキストで描き出される“人種のるつぼを体感する”という言説と対照的である。

Ⅳ.『るるぶ香港』の変化

この章では『地球の歩き方香港』シリーズとは異なる、もう一つ日本社会のメジャーな海外旅行ガイドブックである『るるぶ情報版 海外』の香港シリーズ（以下、『るるぶ香港』シリーズ）を取り上げ、1996年版から2013年版までの推移を辿ってみよう。『るるぶ情報版 海外』シリーズは、同誌のウェブサイトで[10]、

> 「見る」「食べる」「遊ぶ」「ショッピング」など海外の最新情報をセレクト。現地取材が基本だから、旬な話題や今の流行りがよく分かる。

と言っているように、消費や娯楽に重点を置いたガイドブックであり、全編商品カタログのような内容になっている。それは、出発から帰国までのプロセスを詳しく解説し、観光対象も幅広くカバーして紹介する『地球の歩き方ガイドブック』シリーズとは、旅行ガイドブックのカテゴリーとして対極に位置するものだと言ってよい。

同シリーズにおける重慶大厦の名前は、1998年版以前は見られないようだ。1996年～1997年版では重慶大厦地下のショッピングセンター「意法日時装廣場」が紹介されてい

10）『るるぶ.com』「るるぶ情報版 海外シリーズ」（https://www.rurubu.com/book/series.aspx?seriescd=140、2018年1月6日閲覧）。

るが、重慶大厦そのもののへの言及は無い。

1999年版で「ディープな香港」というページが設けられ、九龍城や黄太仙などとともに重慶大厦が取り上げられる。「ディープな香港」というタイトルの箇所のリードは次のようなものとなっている（JTB、1998: 88）。

高級ホテルにステイして買物を楽しみ、おいしいものを食べる。それはそれで正しい。が、もう一歩踏み出すと、庶民感覚に満ちた素顔の香港に会える。祈願場所あり、名物ビルあり……。ディープな香港を体験しよう。

この「名物ビル」は重慶大厦を指すと考えてよい。さらに同ビルは次のように紹介されている（ibid.: 88）。

香港一の多国籍ゾーン　４階から上の安宿街も名物

おそらく香港で知る人ぞ知る最も有名な雑居ビル。入口にはいつも何をしているのかよく分からない人たちがたむろしていて、ちょっと入りづらい雰囲気が漂っている。思い切って中に入ると、奥はさまざまな店舗が集まっている。１階は衣類、時計などだが、家電製品の店が多いのが特徴である。しかし店以上にインパクトの強いのが、ここにいる人達の多彩さ。インド系、中近東系、アフリカ系、アジア系……。まるで、人種の展覧会のようなのだ。香港一の多国籍ゾーンではないだろうか。４階から上には安宿がずらり。こちらも香港の名物として有名だ。

翌年の2000年版では、「ディープな香港」が「香港体験　ロコおすすめの隠れた名所」に変り（JTB、1999: 19）、構成上も前の方のページに移動している。この「隠れた名所」は「じっくり探せば地元の人しか知らないようなおもしろスポット」であるという。

重慶大厦は1999年版の「ディープな香港」の記述と同じ語彙や表現で記されているが、「雑然とした雰囲気が持ち味　バックパッカーの聖地」という小見出しやそれに続く「尖沙咀のというより、今や香港を代表する名所の一つ」という文章も新たに加わっている。

また2000年版からは本文中の地図上に説明文が加えられるようになっている。重慶大厦の説明は下記のとおりである（ibid.: 39）。

種々雑多な人たちがうろつきあやしい雰囲気だが、GF に並ぶ両替店は両替率がよく、奥へ行くほどによくなる。BF はカジュアルなブティック街

2001年版の『るるぶ香港』では重慶大厦の紹介はなくなり、地図上の説明文のみにな

る。同ビルが1990年代末に一時的にクローズアップされた要因は、ライバル誌のような関係にある昭文社の『まっぷるマガジン海外版』香港シリーズ（以下、『まっぷる香港』シリーズ）が1997年版で重慶大厦を大々的に取り上げたことにあるのかもしれない。旅行ガイドブック制作者が他誌を参考にガイドブック作りに当たることは珍しくないというからだ[11)]。

この『まっぷる香港』では、見開き2ページという、旅行メディアにおける重慶大厦の位置づけとしては異例の取り扱いで、「探検！　チョンキン・マンション」という特集が設けられている（K&Bパブリッシャーズ、1996: 28–29）。リードは以下のようなものである。

繁華街にそびえる異空間を覗く
ショッピングセンターやブランド・ショップが並ぶ尖沙咀のネイザン・ロード。香港最大の繁華街に建つブラック・ホールへの入口がチョンキン・マンションだ。このおかしな名前の建物のなかでは、いったい何が行なわれているのか……

こうしたリードともに「香港最後の秘境」・「尖沙咀に開いた西アジアへの入口」（ともに小見出し）が紹介されている。

『るるぶ香港』における重慶大厦は、1990年代末の一時的なクローズアップ後、2001年版ならびに2002年版では地図上の紹介のみという取扱いになるが、2003年版で本文への“復帰”を果たす。エリア情報「街歩き　尖沙咀中心部」の中で、大きな扱いではないものの、7番目に紹介されている（JTB、2002: 64）。

昔の香港の猥雑なイメージを残す雑居ビル。さまざまな国籍の人々がいる。有名なゲストハウスがある。

その一方で、地図上の説明文は地下の商店街に特化したものになる（ibid.: 65）。

地下には1坪程度の店が160軒ほど並ぶショッピング・モール。キャラクター・グッズや雑貨、オリジナルのアクセサリーなど個性派ショップが多い。（営業時間）店によって異なるが、だいたい10～22時ごろ

その3年後の2005～2006年版になると、エリア情報内の紹介文に「名物建築」という言

11）ある旅行ガイドブック編集者の発言。

葉が加わり、次のような説明になっている（JTB、2005: 92）。

かつて香港が魔都とよばれていたころの雰囲気を残すビル。内部には小さなショップ、レストラン、安いゲストハウスなどが雑然と同居。１階の両替所は換金率がいいと評判。

ここでいう「魔都」とは九龍城のことを指しているものと考えられる。後述するように、重慶大厦を九龍城と関連付けるガイドブックは珍しくない。それに応じてか、地図上の説明文も「重慶大厦の前では、今だに偽物時計売りが通行人に声をかける。けして誘いに乗らないようにしよう」というように、トラブル対策に関するものに変化している。またこれ以降も変化することはない。

その後の2010年版では、尖沙咀のエリア情報に重慶大厦の名は現れるものの、重慶大厦はショッピングモールのある場所なのであり、扱いが後退している。すなわち、「まだまだあります！　立ち寄りスポット」の一つとして紹介されるのはCkeショッピング・モールなのであり、重慶大厦はその紹介文の中で以下のように言及されているにすぎない（JTBパブリッシング、2009b: 61）。

ゲストハウスがあることから、世界各国からバックパッカーが集まる怪しいビルとして有名な重慶マンションの1～2Fに、新しいショッピングモールがオープン。２畳ほどの小さな店が軒を並べ、かなり個性的で面白い。

重慶大厦は2年後の2012年版で再浮上する。特集「新風吹き込む尖沙咀建物事情」の中で「番外編　あの重慶マンションも変貌中」という箇所が設けられ、その中でウッド・ハウスとCkeという二つのショッピングモールが言及される形になる（JTB、2011: 15）。同ビルは次のように記述されている。

安宿が集まる雑居ビル「重慶大厦（チョンキン・マンション）」（→P. 71）。混沌とした雰囲気で1961年の完成以来、怪しいビルの代名詞だったが、最近はモールが開業して一変！

また、エリア情報のページにある「街歩きモデルコース④尖沙咀」では、この「番外編」と同じような扱いではあるものの、次のように紹介されている（ibid.: 71）。

バックパッカーのためのゲストハウスがあることから、世界中の旅行者が集まる雑居ビ

ル。比較的レートのいい両替所やエスニック・レストラン、ディスカウント・ショップなど、インターネット・カフェが狭いフロアに軒を連ねる。

また付随した写真には「その独特な雰囲気から今や尖沙咀の名所のひとつに」というキャプションが記載されている（ibid.）。

翌年の2013年版では、2012年版のこれら二つの紹介箇所のうち前者がそのままエリア情報に移動し後者が無くなる形で重慶大厦が紹介されるように変化している（JTB、2012: 65）。

以上のように『るるぶ香港』シリーズでは、紹介のレベルあるいは程度に波があるとしても、重慶大厦が紹介される場合、同ビルは一貫して“両替やショッピングができる怪しい名所”という位置づけにあったと言える。

興味深いことに同シリーズの最新版では、重慶大厦の名は地図上に“ニセモノ注意”として現れるのみで、それ以外は記載されなくなっている。「レトロ喫茶」を紹介するページには重慶大厦地下で営業する蘭芳園があるし、買い物に関するページでも同ビル内のコスメティックストア莎莎が紹介されているが、いずれの箇所でも同ビル自体への言及はない。最近のこの展開は、エキゾチシズムの抑制と実用性の強調という『地球の歩き方ガイドブック香港』シリーズと同じ種類のものなのかもしれない。この変化が、重慶大厦の扱いにおける波のようなものなのか、あるいはもはや重慶大厦自体を同シリーズが観光対象とみなさなくなる段階のスタート地点であるのか、来年度以降の記述から判断する必要がある。

いずれにしても、本章で見てきたように1990年代後半から2010年代前半にかけての推移を見ると、『るるぶ香港』シリーズでは重慶大厦が名所として扱われてきたという変化が見られることは強調しておきたい。

Ⅴ．“怪しい観光名所”

前章の『るるぶ香港』シリーズの例からは、重慶大厦がツーリストに訪問を勧める名物・名所としてのステータスを獲得していくプロセスを見ることができる。この傾向は、2000年代以降に出版されたガイドブックで珍しいものではい。たとえば成美堂出版の『いい旅・街歩き 香港・マカオ』2006年版も重慶大厦を「名物」としている（いい旅・街歩き編集部、2006: 75）。

尖沙咀名物の古い雑居ビル

数々の映画の舞台にもなった名物ビル。なかにはバックパッカー御用達のゲストハウス

やインド人経営のインド料理店などがある。GF には両替商が多く、レートもいい。

2000年代に入り重慶大厦を利用するアフリカ大陸出身者が増加した事実が記述に反映される例もある。『まっぷる香港』シリーズの重慶大厦の記述は以下のように変化している。2005年版では（P. M. A. トライアングル、2005: 14）、

ネイザン・ロードに位置する巨大な雑居ビル。九龍城が取り壊された後に唯一残されたカオスともいわれる。1階には換金レートのよい両替所が並び、上階は小規模の安宿とインド料理店がぎっしり。さまざまな国籍の人々が行き交い圧倒されるはず、昼間は観光客が多いので両替も問題ない。

というものであったが、2012年版には次のように「アフリカ系」の言葉が見える（K&B パブリッシャーズ、2012: 16）。

ネイザン・ロード沿いに建つ怪しい雑居ビル　重慶大厦
内部は小さな商店や両替所や、安宿がひしめきあい、まるで迷路のよう。インド系、アフリカ系が多く独特の異国情緒が漂うビルだ。

さらに2017年版・2018年版になると、次のように抑制された記述となる（昭文社編集部、2016: 71）・（昭文社編集部、2018: 71）。

低階層には両替所が、高層階には安宿が集まる雑居ビル、チョンキン・マンション。インド系、アフリカ系の人々が多く集まり、独特の雰囲気

重慶大厦を名所として描く最近のものでは、2017年刊行の『地球の歩き方 BOOKS Hong Kong 24 hours 朝・昼・夜で楽しむ 香港が好きになる本』の例がある。「かつての魔窟でディープな異国ランチ」という章があり（清水、2017: 48–49）、重慶大厦のインド料理、九龍城のタイ料理、牛頭角の創作料理という三つの「異国ランチ」が紹介され、重慶大厦の箇所ではこの「魔窟」の怖さと「おいしいカレー」が対比的に強調されている（ibid.: 48）。

無法地帯だった九龍塞城（九龍城砦）や重慶大厦（チョンキン・マンション）、薄暗い工業地帯など、かつての香港には 旅行者が近寄りがたい場所がありました。すっかり治安がよくなった今だからこそ、かつての 魔窟でディープな香港を味わうのもまた

一興です。

当時のあやしい雰囲気を最も残しているのは、重慶大厦。インド人をはじめとするアジア系の人種のるつぼで、好レートの両替商と安宿が入っていることで有名です。私個人としては、昔、『深夜特急』に憧れてある宿に泊まったとき、早朝に何かの犯人を探し回る機動隊のような人たちに、ドアを蹴破る勢いでたたき起こされたという、背筋の凍る思い出があるため、宿泊はあまりおすすめできませんが（今では警備員詰所を設け当時より安全な場所になっているようですが）、食事となれば話は別。インド人コミュニティが根づくこのビルの中には、およそ30軒のカレー屋が入っていて、「おいしいカレーを食べたければ重慶大厦へ」というのは香港在住者の間では常識です。といっても、どの店のカレーでもいいわけではありません。個人的な統計では５軒に１軒ぐらいの確率でおなかを下すので、レストラン選びには慎重さが必要です。

この記述のユニークな点は、「おなかをくだす」というリスクを挙げているところにある。重慶大厦のインド料理店について述べる旅行ガイドブックでこうしたリスクに触れているものを見つけるのは困難である。同ビルのインド料理店が実際に不衛生なのか、この著者の胃腸が敏感だという「個人的」な問題なのか、あるいは単に重慶大厦の危なさを誇張するための記述なのか、判断は難しいものの、重慶大厦の訪問が一筋縄ではいかないという印象を読者に与える効果があることは否定できない。

『るるぶ香港』シリーズと同じ JTB パブリッシングによる『ララチッタ』香港シリーズの最新2018年版では、「街あそび（九龍）　香港一の繁華街・尖沙咀　午後から半日プラン」でという章で（JTB パブリッシング、2017b: 68–69）、時計塔と尖沙咀プロムナード、1881ヘリテージ、ザ・ペニンシュラ香港、ナッツフォード・テラスとともに、重慶大厦が尖沙咀の名所 5 箇所に列挙され、次のように紹介されている。

尖沙咀の混沌がここに

ゲストハウス（安宿）が集まるビルで、その怪しげな雰囲気から名所として人気に。レートの良い両替所や評判のカレー店などがある。映画『恋する惑星』のロケ地にもなった。

同じ JTB パブリッシングの『タビトモ』香港シリーズでも、「世界中からバックパッカーが集まる怪しいビル」（JTB パブリッシング、2009a: 79）、「安宿が集まる怪しいビル」（JTB パブリッシング、2017a: 81）というように、うさん臭い場所として紹介されている。

ただし、うさん臭いからといって“避ける場所”とカテゴリー化されているのではない。むしろ、「必要なのは、好奇心とほんの少しのきっかけ」として、「信和中心」や「先

達廣場」とともに重慶大厦内のショッピングモール「Cke ショッピングモール」が“訪問すべき場所”と位置づけられている。たとえ足が引ける場所だとしても、「尖沙咀の中心」に位置する「有名な」観光地という地位を与えられている（JTB パブリッシング、2009a: 79）。

こうした“重慶大厦は怪しいけれど訪問する価値がある”という言説が成立したうえで、これまでの引用箇所でも名が上がった映画『恋する惑星』が果たした役割は大きい。この映画の撮影は、重慶大厦側の同意なしに行われたという。重慶大厦家主会の主席は朝日新聞の記事の中で、「イメージを損ねる、とロケを断ったら、盗み撮りされた。今は映画の名で商売させてもらっている」と語っている[12)]。

たしかに、ガイドブックの中には前掲の『いい旅・街歩き 香港・マカオ』2006年版のようにとくに個別の映画を挙げないものや、テレビドラマ『劇的紀行 深夜特急 ‘96』（1996年）や映画『天使の涙』（1996年）に触れるものも存在するが[13)]、『恋する惑星』の言及が圧倒的に多い。すでに挙げてきた例のほかに、『地球の歩き方 aruco7 香港』2010年版における、

> 映画『恋する惑星』の舞台にもなった有名な雑居ビル。格安ゲストハウスや両替所、インド人が手がける本格インド料理レストランが揃う。

という記述や（地球の歩き方編集室、2010: 153）[14)]、『トラベルデイズ』香港マカオシリーズの「街歩き＆観光」に関する尖沙咀の章にある次のようなボックステキストの例がある（K&B パブリッシャーズ、2012: 51）[15)]。

> <u>ココにも注目　重慶大厦</u>
> 『恋する惑星』など多くの映画や小説の舞台になった雑居ビル。中は一般の住居やオフィスのほか、数々のレストランやショップ、両替商、世界中を旅するバックパッカーが使用するゲストハウスなどがひしめき合うように入り、多様な民族の人々が行き交っている。

12）2005年8月5日付け朝日新聞記事「（アジアの街角）香港・重慶大厦： 5　15:00 治安対策を最優先」。
13）たとえば、『劇的紀行 深夜特急 ‘96』については『地球の歩き方個人旅行マニュアル・香港』シリーズ1997年版ならびに『ブルーガイドわがまま歩き 香港』シリーズ1999年版で、『天使の涙』については『ブルーガイドわがまま歩き 香港』シリーズ2004年版ならびに『地球の歩き方ポケット香港』シリーズの2008年版で言及されている。
14）ただし同シリーズの2012年版では重慶大厦を“名所”とする箇所は無くなり、客引きなどに関する注意喚起としてしか紹介されていない。
15）2017年発売の最新版も同じ。

ウェブサイト『AllAbout 旅行』の記事「『恋する惑星』のロケ地、香港に恋をする！」でも、重慶大厦が次のように紹介されている[16)]。

ここは映画のなかでも麻薬密売のシーンに使われているだけあって、雑然とした香港の街でもひときわ異彩を放っている場所。昼間でもなんとなーく怪しいムードが漂っています。ビルの中には食堂・両替商・洋服屋・電気屋・おもちゃ屋など様々なお店がひしめき合い、インド人やアラブ人など多種多様な人々が集まっています。ちなみにここの両替屋さんはレートがいいことで有名。バックパッカー御用達の安宿なども軒を連ね、沢木耕太郎さんの旅行小説『深夜特急』に出てくるゲストハウスもここにあります。

こうした映画のイメージに対して違和感を表明する者もいる。過去数十年にわたり多数の旅行記を刊行してきた下川裕治は、40年前から変わらない看板の文字に「ほっとしてしまう」くらいの重慶大厦の愛好者である[17)]。彼によれば『恋する惑星』が描く重慶大厦のイメージは次のようにしっくりこないものになる（下川、2015: 26）。

汗の饐えたにおいが漂ってうごめきそうな小部屋に、インド人やバングラデシュ人が蠢いていた。香港の庶民生活というより、危険なビルというイメージが伝わってきた。
香港に滞在するたびに重慶マンションに泊まっている身としたら、どこかぴんとこないイメージだった。

しかしながら、映画『恋する惑星』が描いた重慶大厦は少なくとも香港社会のイメージに適うものであったようだ。本稿の冒頭でも言及したマシューズによれば、1990年代初期の重慶大厦は映画の中の設定のように一般の香港人が訪れるようなところではないものの、映画が「当時のこの場所のいかがわしい雰囲気を正確に伝えている」と述べている（Mathews, 2011: 14–15）。

すでに引用箇所で示してきたように、こうした“怪しさ”が香港にかつて存在した九龍城と関連付けられることも少なくない。たとえば、実業之日本社の『ブルーガイドわがまま歩き』香港・マカオシリーズの2008年版では、尖沙咀のエリア紹介の章で「ネイザン・ロードを中心に高級ホテルが立ち並ぶが、重慶大厦のように安宿が集まる複合ビルや屋台村など、混沌とした雰囲気も共存するのが香港らしい」とし（ブルーガイド海外版編集部、2008: 88）、さらに、他の旅行ガイドブックと比べると比較的大きいスペースを用い

16）「旅行ガイド」の古屋江美子による記事（https://allabout.co.jp/gm/gc/67035/、2018年1月12日閲覧）。
17）（下川、2015）の口絵写真キャプション。

て紹介している（ibid.: 91）。

LOCO のとっておき情報：重慶大厦でディープアジアな風情を楽しむ
館内でウロウロする大勢のインドや中東系の人々が醸しだす怪しい雰囲気を持つチョンキン・マンション重慶大厦（中略）。スリなど治安には充分に注意を払って訪れたい。（中略）ちなみに最近は建物の老朽化が激しく、取り壊しも噂される。九龍城なきあとの古き良き香港を象徴する名所のひとつだけに、今のうちにぜひ。

重慶大厦の場合は、敷地の帰属が不明であり犯罪組織によって支配されていたという九龍城とは事情が大いに異なるし、両者を「古き良き香港」の象徴とすることには大きな疑問を感じるのであるが、両者の混同もしくは同一視は香港社会に長く存在してきたものだという。前述のマシューズによれば、両者は「香港の『他者』――香港の『闇の奥』」（Mathews, 2011: 16）であり続け、香港社会から忌避されてきた。日本の旅行ガイドブックで重慶大厦が九龍城と関連付けられるのも、こうしたローカル社会の重慶大厦像を利用したからだと思われる。

以上映画『恋する惑星』の引用の事例について述べてきたが、最後にセキュリティの面における変化にも触れておかなければならない。重慶大厦では、2000年前後から管理組合にあたる家主会が治安を中心に環境改善に取り組み始め、ガードマンが常駐するようになっている[18)]。この環境面での変化は、重慶大厦が“怪しいけれど訪問すべき名所”のように扱われるようになった時期と重なっている。そうしてみれば、重慶大厦がガイドブックが推奨しても問題のない、低リスクの空間になったからこそ、同ビルが“名所”のステータスを獲得することができたと想定できる。すなわち“怪しい、いかがわしい場所”が“訪問すべき観光対象”に変換できたのは、それがツーリストにとってある程度安全な空間になったという環境面での変化も大きく作用しているからだと考えるべきである。

2017年 3 月17日に NHK が放映したドキュメンタリー番組『ドキュメント72時間』の「香港　チョンキンマンションへようこそ」という放送回は、こうしたセキュリティの役割を過不足無く示しているものだと言えよう。同回のウェブサイトには以下のような紹介がある[19)]。

近未来都市・香港。街のメインストリートにある、ちょっと怪しい巨大ビル「チョンキ

18）2005年 8 月 5 日付け朝日新聞記事「（アジアの街角）香港・重慶大厦： 5　15:00 治安対策を最優先」。
19）「ドキュメント72時間『香港 チョンキンマンションへようこそ』」（https://www.nhk.or.jp/docudocu/program/210/2907048/index.html、2018年 1 月10日閲覧）。

ンマンション（重慶大厦）」。迷路のような通路に両替所や飲食店が並び、上階には格安ゲストハウスがひしめく。黒人やインド人など100か国以上の人々が行き交う、まさに巨大な人間交差点。移民排斥のニュースが世界を駆け巡る昨今、様々な国の人が入り乱れて暮らすチョンキンマンションから共存のあり方を考える３日間。

番組の中で明かされているように、ドキュメンタリーの撮影は独自に進められたのではない。取材班はビル全体をカバーする監視カメラのモニターが並んだ警備室を拠点に、「人々が行き交う街角」[20]として重慶大厦の撮影を進めている。文字通り一望監視の特権的な場から、“怪しい重慶大厦”がドラマ化されているのである。

Ⅵ. むすびにかえて

以上本稿では、香港を対象にした日本語旅行メディアで重慶大厦がどのように扱われてきたのかを検討してきた。さまざまな旅行メディアを概観して分かることは、第一に、重慶大厦の描写には“怪しい”といった表現がほぼ一貫してみられ、“怪しいけれど訪問する価値がある”という言説が定番化している点である。“怪しさ”といった表現でエキゾチシズムを強調するガイドブック類は現在でも珍しいものではない。

第二に、『地球の歩き方香港』シリーズと『るるぶ香港』シリーズではこの言説の展開に違いが見られる。前者では、初期では重慶大厦のエキゾチシズムが強調される傾向があったが、段階的にそれが抑制され、現在では実用性を強調するようになっている。

その一方で『るるぶ香港』シリーズでは、1990年代末に一度クローズアップすることはあったが、むしろ重慶大厦が名所として扱われるようになるのは2000年代に入ってからであった。同じ傾向は他の旅行ガイドブックにも当てはまるようである。ただし最近の同シリーズでは、前者すなわち『地球の歩き方ガイドブック香港』シリーズと同じようにエキゾチシズムを抑制する記述になっている。

第三が、“怪しさ”を強調するにしても、一般にガイドブックは“怪しさ”を詳しく説明しないという点である。重慶大厦が九龍城と同種の怪しい、いかがわしい場所だというイメージは、そもそもローカルの香港社会でも一般的なものであり、それを効果的に利用したメディア作品に映画『恋する惑星』がある。旅行ガイドブックではこうしたステレオタイプがなぞられるだけで、“怪しさ”について突っ込んだ説明はない。2000年前後から増加してきたアフリカ系の存在やアフリカ系が増えてきた経緯について触れているものもないことはないものの、重慶大厦は依然として“インド人の世界”である。たしかに「香

20）番組ホームページより（http://www4.nhk.or.jp/72hours/、2018年１月10日閲覧）。

港らしい」と述べるガイドブックも存在するが、それは単に“ゴチャゴチャした混沌”としての香港らしさなのであり、「ローエンドのグローバリゼーション」（Mathews, 2011）の場といった、香港の縮図（の一つ）のように重慶大厦が果たしてきた社会経済的な機能について言うものではない。

こうした“怪しさ”については、ツーリズムにおけるオリエンタリズムやエキゾチシズム、あるいはレイシズムという観点から、さらなる分析が必要である。またそれに加えて、移民という切り口からの考察も欠かすことができない。重慶大厦の“インド人”や“アフリカ人”は広く移民というカテゴリーに位置づけることができ、たぶんにナショナリズム的な旅行メディアにおいて移民や文化的多元性、あるいは“無国籍さ”といったものがどのように表象されているのかについて考える上で、重慶大厦は有意義な事例となるであろう。

またそのほかに、重慶大厦をより広い香港観光という文脈で考察する必要性も指摘しておきたい。重慶大厦は、たとえ名所化してきたとしても、依然として「知る人ぞ知る」的な位置づけにあり、一般的な女性誌の香港特集には見られない類の観光アトラクションだといえる。たとえば、雑誌『Hanako』の2014年9月11日号「香港で元気になる！」には重慶大厦の記述は含まれていない。言うまでもないことだと思われるとしても、念のために記しておけば、重慶大厦は、広東料理やお茶、エステ、夜景などとは異なり、日本人女性を元気にできるアトラクションなのではない。2015年9月号の『FRAU』についても同じことが言える。「食べて、歩いて、また食べて　あがる香港」という特集の中でも重慶大厦は扱われていない。重慶大厦では、日本人女性は「あがる」ことができないのである、少なくとも現時点では。

参考文献

＊旅行ガイドブックについては、内容を引用したものだけを記載している。

いい旅・街歩き編集部　2006『いい旅・街歩き 香港・マカオ』成美堂出版
大橋健一　2002「『台場小香港』を歩く」『アジア遊学』第36巻、126–127頁
K&B パブリッシャーズ　1996『マップルマガジン 香港・マカオ』昭文社
K&B パブリッシャーズ　2012『トラベルデイズ 香港マカオ』昭文社
沢木耕太郎　1994『深夜特急〈1〉香港・マカオ』新潮社（kindle 版）
沢木耕太郎　2008『旅する力――深夜特急ノート』新潮社
JTB　1998『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB
JTB　2002『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB
JTB　2005『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB
JTB パブリッシング　2009a『タビトモ 香港』JTB パブリッシング
JTB パブリッシング　2009b『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB パブリッシング
JTB パブリッシング　2011『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB パブリッシング

JTB パブリッシング　2012『るるぶ情報版 香港・マカオ』JTB パブリッシング
JTB パブリッシング　2017a『タビトモ 香港』JTB パブリッシング
JTB パブリッシング　2017b『ララチッタ 香港・マカオ』JTB パブリッシング
清水真理子　2017『地球の歩き方 BOOKS Hong Kong 24 hours 朝・昼・夜で楽しむ 香港が好きになる本』ダイヤモンド・ビッグ社
下川裕治　2005『歩くアジア』双葉社
下川裕治　2015『週末香港・マカオでちょっとエキゾチック』朝日新聞出版
自由旅行マニュアル製作委員会　2008『香港 & マカオ自由旅行マニュアル』三才ブックス
昭文社編集部　2016『マップルマガジン 香港・マカオ』昭文社
昭文社編集部　2018『マップルマガジン 香港・マカオ』昭文社
地球の歩き方編集室　1988『地球の歩き方35 香港・マカオ』ダイヤモンド・ビッグ社
地球の歩き方編集室　2010『地球の歩き方 aruco7 香港』ダイヤモンド・ビッグ社
地球の歩き方編集室　2017『D09 地球の歩き方 香港 マカオ 深セン 2017～2018』ダイヤモンド・ビッグ社
P. M. A. トライアングル　2005『マップルマガジン 香港・マカオ』昭文社
ブルーガイド海外版編集部　2008『わがまま歩き10 香港マカオ』実業之日本社
Mathews, 2011 “Ghetto at the Center of the World: Chungking Mansions, Hong Kong”. University of Chicago Press.
山口さやか・山口誠　2009『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社